【田井】　川口　重樹　さん（７９才）

昭和２０年、私は１８歳でした。

当時、多くの同級生は出征していました。

私も心構えはできていましたが、早生まれのために出征しないで、枚方警察署の屋上にあった監視署に勤めていました。

双眼鏡で飛行機の機種や高度を判断して、大阪府庁へ報告する仕事でした。

６人ほどの班をつくって昼夜班ごとに２人ずつ交代して監視していました。

枚方のほか、寝屋川からは田井、三井、郡、太秦から来ていました。

私は終戦まで監視署に勤めていましたが、大阪市内の空襲の時は、投下された爆弾や焼夷弾で焼け焦げた紙切れなどが風に乗って飛んできたのを覚えています。

私が、爆弾が投下されたのを体験したのは、昭和２０年の初夏の頃だったと思います。

善行寺の前にあった知り合いの家にいた時に空襲警報が鳴ったので、自宅に帰る途中、近くに爆弾が投下され、気が動転して傍の川の中に飛び込んでいました。

爆弾は２発でした。

八尾枚方線に通じる現在の国道１７０号、善行寺の東側、当時は六間道路と呼ばれていた堤防道路に１発。

そこから５０メートルほど東に離れた田んぼの中にもう１発投下されていました。

私は、川の中に逃げたものの砂が雨のように落ちてきて、怖かったのを覚えています。

堤防道路の斜面の砂が爆風で舞い上がって落ちてきたのでしょう。

２、３日して見に行ったら、道路は幅７割ほどが抉り取られるように崩れ落ち、田んぼにも大きな穴があいていました。

幸い怪我人はありませんでしたが、善行寺の屋根がかなり損傷し、瓦が割れるなどの被害はありましたが、民家に被害はありませんでした。

当時、村には防空壕はなかったように思いますが、田井のこの辺りにも艦載機が飛